

南米ピラポコロニアの想い出

佐 藤 敏 雄

国際協力事業団のパラグアイ南部農林業開発プロジェクト派遣専門家（林業開発センター勤務）として、1981年8月から約2年半、パラグアイ共和国ピラポコロニア（邦人移住地）に住み、プロジェクト勤務の傍ら、村の人々に接する機会があった。この村の人々は日本から20年前に移住してきた人達とその子弟である。

ピラポコロニアというのは通称で、正しくは、イタプア県ペリヤビスタ郡アルトバラナ移住地と云う。しかし、このコロニア8万ヘクタールの中を西から東へ流れている川を土地の人はピラポ川と呼び、ピラボの呼称が一般に親しまれている。ピラボとは現地の言葉（ガラニー語）で魚を手づかみに出来るという意味がある。

ここはパラグアイの東南部に位置し、アルゼンチンとの国境パラナ河に面している。土壤は肥沃で農業地として有望視され、日本からの移住地はピラボの他、フラム、チャベスがあり、近くのパラグアイ第三の商業都市エンカルナシオンに住む人も含め、約3千人の日本人および日系人がイタプア県に住んでいる。

農業生産物は大豆を主体に裏作の小麦、その他ツング（油桐）、キリ（台湾桐）、肉牛があり昨年まで養蚕もあった。コロニアの二十数年は天然生林の開拓と営農作物の模索の歴史と云って良い。農業にとって天候がその豊凶を左右するのはどこでも変りなく、ピラボも年によって大きく変る空模様が移住者を苦しめ続けていた。私も滞在したわずか3回の夏季に干天と長雨をそれぞれ体験した。

大豆は10月から12月にかけてまき付けし、3月から5月に収穫する。1982年の1月は前年の小麦がまあまあということで、コロニアも炎天下それなりに正月気分を味わっていた。お正月といっても、全体的に借金をかかえ、電気も自家発電、テレビも数軒に入っている程度、そして国はカソリック教という中でのこと、故国日本を想って親しい人達が集い、また部落対抗の野球大会、日本人コロニア対抗のバーレーボール大会、村主催のカラオケ大会をもよおすくらいである。15日には日系人だけの成人式も行っている。

ところが1月に入って雨が無く、発芽したばかりの大豆、生長中の大豆が弱り出してきた。この頃会う人の挨拶は「雨が欲しい」、「今年の大豆は2tを切る」など重苦

SATO Toshio : Memories in Pirapo Colonia
林野庁林業講習所

しいものになってきた。雨はチャクラ（畑のこと）だけでなく生活用水のためにも早く欲しかった。農家は各戸に井戸を掘ってあったが10m位の深さでは水が持たなかった。雨雲は通常南の方からやってくる。ラジオがブエノスアイレス市に雨と報せれば、1日から2日後にはピラポにも雨がくる。挨拶と同時に南の空を見上げる。1月の後半は、午後から南に雲が出て今日は雨があるかも知れないと思う日が続いた。ピラポから南方30kmのところにドイツ人のコロニアがある。その辺では俄か雨が毎日のように来ていた。余談になるがドイツ系の人は、日本人が山を伐ってしまったので雨が降らなくなったりと話していると聞いたことがある。

バラナ河から蒸発した水分が雲になって北上してきてもピラポへ来るまで持たないのだと推察したものである。とうとう1月は一滴の雨もなかった。幸い2月になって雨があったので晩生大豆が出来、ヘクタール当たり平均約2トン位の収穫にはなった。

皮肉にも、この年パラグアイやブラジル南部は歴史的な大雨の年になった。6月に降った雨はパラグアイ河を氾濫させ、10月中旬から11月にはまた断続的な大雨が続いた。ピラポ辺の年間降雨量は1,800m/m位と云われているが、10月と11月でこの半分近くも降ってしまう状況であった。

10月はパラグアイの夏が始まる。農家は小麦の収穫が終って大豆の播種と忙しくなってくる。そのまいた種子、発芽したばかりの大豆がこの雨で流失し、またまき直しをした農家が多かった。ひどいところは3回もまいたという。チャクラは平坦に見えるが、わずかな傾斜が種子ごと土を流す。ピラポの土テラロッシャは粒子が細く、そのためか雨の日が続くと水をたっぷり含み、そこへ激しい雨がきて表土を流してしまうのである。

そんなことで、1月に入ってまで播種作業をしていた農家もあったが、大豆の生育は順調で3トンも見込まれる程であった。しかしこの年のコロニアは前年の大豆の低迷、小麦の病害（雨が影響していた）などで正月行事も控え、カラオケ大会もなかった。むしろ賃金と先行きの不明さに、離農又は日本へ戻ることを考えている農家があると噂されていた。

3月の下旬早生大豆は収穫され出し、豊作疑いなしの活気が見えてきた。ところがまた雨だ。それでも4月は週に2日ないしは3日位はコンバインが作業出来、遅れながらも六割以上は収穫が進んでもう一息というところで雨が続き出した。雨が止んでもチャクラが乾かないといわざりで作業が出来ない。どうにかコンバインが入れ作業に掛っても、翌日にはまた雨という状態が続いて、とうとう黒くなった大豆を畑に残したままのところが方々に見られた。10年位前、コンバインが無かった頃は、刈った大豆をチャクラで乾燥する段階でやはり雨で腐らすことがあったというが、コンバインになってしまって作業が出来なくてはどうにもならず、ピラポでは30%位が畑に残った。ラムコロニアでは50%が収穫出来なかつたと聞いた。農業の難しいところだと思った。天候は不順でも、天気予報システムが日本並みにでもなれば、もう少しは対応の仕方もあるうにと思ったものである。

1984年は大豆の作柄は良く、何よりも北米大豆の不作から値が高騰し、ピラポコロ



写真 ピラポコロニアのウスバギリ（台湾桐）5年生植栽林

ント用として利用されていたが、近年は石油製品に押され需要が減少し、ピラポコロニアの農家の多くは、せっかく育てた10年～15年生のツング樹を伐り倒し大豆畑に切り替えた。ところが皮肉なことに、最近、ツング油塗料がテレビ等電気製品用として極めて優れていることが認められ、前年の2倍以上の価格で売れた。単年作物の反省からツングが再び見直されている。マテ茶はペラグァイ、アルゼンチンの人が好んで飲む茶で、その特異な味と効用から徐々にヨーロッパにも輸出され出してきている。

この他、オレンジ類などの果樹もあるが、人口が少ないこの国では営農対象になっていない。そこで植林としてマツ、ユーカリが注目され出してきた。前述の表土流失が大きなきっかけとなったが、それ以前からも農家の人々は植樹を考えていた。キリの栽培が大豆、小麦の不作の年に生活を支えた農家もあった。また、パラナ河の対岸のアルゼンチンでは同じ頃、日本から移住してきたコロニアが植林によって現在良い経営状況にあることも刺激となっている。もちろんアルゼンチンのようにバルブ材、製材用に高い値で売れるかという不安はあるが、気候そして市況の不安定な下で、單一作物での農家経営は危険だという考えがコロニアの多くの人々に広まりつつあるようだった。

そんなことで、私の勤務していた林業開発センターのマツ（スラッシュマツとカリビアマツが主である）、ユーカリの苗木も売れ出し、'82年には2万本しか売れなかつたが、'83年には10万本、私が帰国した'84年には20万本の苗木が全部売れたと聞いた。

現地に赴任した当時、「植林もしたいが、今日の生活に追われて……」とコロニアで云われたことがあった。それから2～3年でこれ程、林業センターがコロニアに溶け込めるとは思ってもいなかった。

ニアにも活気が戻ってきたと聞いている。そして、短期作物一本槍の不安定さと畑地の表土流失問題などから、永年作物の見直し、植林との複合営農が話題になってきているのが現状である。

永年作物には、キリのほか従前から栽培されてきたツング（油桐）、マテ茶がある。ツング油は主にペイ